研究ノート

言葉果つるその先に

――漫画『南の島の異邦人』を読む――

小　林　　誠

1.「どのように生きるのか」

本論では，ポリネシア・ツバルの人々とともに暮らしてきた日本人女性である，もんでん奈津代さん（以下，ナツと呼ぶ）が 2019 年から 2020 年にかけて発表した漫画『南の島の異邦人』の検討を通して，人類学者のティム・インゴルドのいう「どのように生きるのか」をめぐる一つの軌跡を辿ることを目的とする。

インゴルドは人類学とは「どのように生きるのか」という問いについて考えるものであるという。そのために，人類学者は「彼らが対象として選んだ人々とともに研究する」のであり，それは「世界に入っていき，人々とともにする哲学である」という。それこそがフィールドワークや参与観察と呼ばれるものであり，人類学者は「フィールド」と呼ぶところで「人々とともに研究」する（インゴルド 2020）。

ナツは大学で文化人類学を学んだともあるが，人類学者ではなく「南太平洋生活研究家」を名乗る在野の研究者であると位置付けることができる。しかし，「どのように生きるのか」とは，まさにナツが引き受けてきた問いでもあり，それをツバルの人々とともに研究してきた。ナツは著書で次のように綴っている。「『どうやって生きていこう？』がいつもわたしのテーマだった。これで身を立てたい，という目標ができたときはいい。それがおぼつかなくなると，ひどい精神不安に陥った」（もんでん 2010：178）。「そして見つけたツバルの土の暮らし。そこでは樹さえ植えればお金を得る心配をしなくていい，ひと本来の暮らしがあった」（もんでん 2010：178）。「どのように生きるのか」を「人々とともに」考えるのが人類学だとするならば，ナツも人類学をしてきたのである。あるいは，人類学者以上にその問いを引き受けてきたともいえる。

筆者は 2019 年にナツについての論文（小林 2019）を発表したことがある。そこでは，執筆時までに発表されていたウェブサイトの記事，著書ならびに本人へのインタビューなどを基に，ナツとツバルの人々および自然とのつながりについて考察した。本論では，その後 2019 年から 2020 年にかけて発表された漫画『南の島の異邦人』を詳細に検討し，「どのように生きるのか」が漫画でどう描かれているのかを論じていく。

2.「南の島」の漫画

「南の島」は，絵画，小説，漫画，映画，アニメなど多様な媒体で描かれ，イメージが形成されてきた。文芸評論家の川村湊が「“南洋”に対するイメージの形成と現実の南洋支配とは，糾える縄のように展開した」（川村 1994：88）と指摘するように，日本における「南の島」をめぐる表象は植民地主義と密接なつながりをもってきた。そのことは，「南の島」の漫画の先駆けともいうべき「冒険ダン吉」にも色濃く現れている。

「冒険ダン吉」は『少年倶楽部』に 1933 年から 1939 年まで連載された漫画で，当時は田河水泡の「のらくろ」と少年たちの人気を二分したといわれる。連載にかなりの修正が施された上で 1934 年に『冒険ダン吉』，1935 年に『冒険ダン吉大遠征』，1938 年に『冒険ダン吉無敵軍』として出版された（竹内 n.d.）。「痛快漫画物語」と銘打たれているが，絵と文章を並列させた絵物語形式である。当時，日本の植民地支配下にあったミクロネシア（南洋群島）が舞台であると考えられており，そこに流れ着いた主人公の少年ダン吉が，黒ネズミの「カリ公」に助けられつつ，現地に住む「蛮公」の王となって活躍する，といったものである。

政治学者の矢野暢は「『未開』『下等』『怠惰』『愚鈍』『不潔』などの特徴でとらえる南洋の『土人』観」あるいは「固定観念」の最たるものが「冒険ダン吉」であるとし，「南洋は密林に猛獣や野鳥どもが横行し，黒い首狩り人種が住む野蛮地域」といった見方を「『冒険ダン吉』シンドローム」と呼んだ（矢野 2009：143）。矢野はこの「『冒険ダン吉』シンドローム」を「基礎」として，現地の人々には「洗練されたマナー」や「儒教的なエトス」で対応する必要はなく，「むきだしの原始人格」で付き合えばいいと考える昭和の日本人の「『南進』カルチャー」が形成されることになったと指摘する（矢野 2009：286–7）。矢野のいう「南進」とは，「日本人の南方との自然な関わりの総体」である「南方関与」が「国策と結びつき，望ましくない傾向を帯び始めた局面」を指すものであるという（矢野 2009：9）。

先述の川村湊も同様に「冒険ダン吉」は「南洋についての固定的な観念のパターンとしての南洋版“オリエンタリズム”，すなわち“トロピカリズム（南洋趣味）”」（川村 1994：88）と論じる。そして，「冒険ダン吉」をはじめとする「通俗的な」漫画や読み物などに登場する現地の人々は「獰猛，無知，怠惰，凶悪，残虐，不潔，迷妄，蒙昧，猥雑といった言葉で形容されるマイナスのイメージを負わされた人々であり，その存在ゆえに日本人の文明化，文化度の高さを対照的に示すためのものにほかならなかった」と批判する（川村 1994：89–90）。それは，ダン吉と現地の人々の描き方の対照性に顕著に現れる。川村は矢野の『日本の南洋史観』においてすでに指摘されているとしながら，現地の人々が腰ミノだけで描かれている一方で，「どんな小さなコマにおいても，常にダン吉の左腕に時計を描くことを忘れ

なかった」し，腕時計を「“階層分化”させる象徴物」と論じる（川村 1994：25）。

映画学者の鷲谷花は「冒険ダン吉」における主人公であるダン吉，ネズミ，現地の人々の関係性について，差異，敵対，主従といったキーワードで詳細に論じている。鷲谷によれば，人間であるダン吉とネズミである「カリ公」の違いが，形状，大きさ，着衣の有無などのあらゆる点で強調されており，そうした外見上の差異が両者を隔てると指摘する（鷲谷 1998：112）。そして，この差異によって「上下関係」が導き出され，それが「主従関係」となるというのである。他方で，主従関係を拒む時，差異は自動的に敵対となる。鷲谷は「冒険ダン吉」の敵役である「蛮公」たちが，ダン吉を敵として攻撃してくる理由は，ダン吉の肌の白さという外見的な特徴のみに起因すると指摘する。そのため，ダン吉が全身に泥を塗って変装したときは仲間として歓待され，にわか雨で泥が流れて元の「白い人間」に戻ると，敵意をむきだしにされる。しかし，敵対した相手はすぐに上下関係に組み込まれる。「冒険ダン吉」では「ダン吉のゆくてに次々と現れては襲いかかってくる『蛮公』たちは，いとも簡単に屈服しては，『1，2，3……』と胸に書かれた番号によって識別される家来の群と化してゆく」のである（鷲谷 1998：113）。

「冒険ダン吉」は作者の島田啓三による「南洋」での直接的な体験に基づくものではない。復刻版において島田は以下のように振り返って記している。「冒険ダン吉」の構想は，「私が少年時代から持ち続けて来た夢の展開」である。それは，「どこか寒くない南の島……無人島あたりで王様になりたい――動物たちを家来に従えて――お金の心配もないし――宿題もない――」という「果てしもなく拡がる雲のような」願望だった。そして，「当時は南洋群島が日本の委任統治領であり，南進論が南方開発という形で押し出され，ちょうど日本中の目が南方に向けられていたので，ダン吉の活躍舞台として，南の島というのは最適であった」（島田 1967）。少年の夢は「南進」という日本による植民地主義を背景に，漫画という形で実現されることになったのである[1)]。

さて，川村は日本人にとって“南洋”は「文明」に対する「未開」や「原始文化」であったとした上で，それに対する「相反する二つの反応」について論じている。一つ目は「恐怖，嫌悪，侮蔑であり，それは同情，啓蒙，教化への使命感や冒険心を引き起こす」といい，二つ目は「憧憬，共感，好奇心といった情動である」というのだ。川村によれば，その二つは「同じ心の動きの二つの極点」であって，「簡単に弁別することのできない複合的な感情」であるとしている（川村 1994：90）。しかし，前者が冒険ダン吉のように「南進」を背景にした「冒険心」を喚起するものであるとするならば，後者の「憧憬，共感，好奇心といった情動」が何をもたらすのかを問うことも無意味ではないだろう。

『水木しげるのラバウル戦記』（以下，『ラバウル戦記』と略す）は，「憧憬，共感，好奇心といった情動」の帰結であるように思われる。それは，皮肉にも日本の「南進」の一つの結果として起きた太平洋戦争中，現在のパプアニューギニア・ニューブリテン島のラバウルを

中心として，二等兵として従軍していた水木しげる自身の体験が基になっている。興味深いことに水木は子どもの時に「冒険ダン吉」を愛読していたというが（水木 2002：126），「冒険ダン吉」において主人公のダン吉が現地の人々を主従関係に組み込むのに対して，『ラバウル戦記』において主人公の水木は現地の人々と交換し，交流し，友情を育むなど，その描き方は対照的である。

『ラバウル戦記』が成立した事情は複雑である。戦争後，復員した水木は武蔵野美術学校（造形美術学園）に入学し，「発表するあてもなく」，「ラバウル戦記」と題した一連の絵を1949 年から 1951 年ごろに描いたという。これが「ラバウル戦記　その一　出發」と「ラバウル戦記　その二　前線での生活」である。しかし，その後，経済的な事情で働かざるを得なくなったため，「一番面白い部分」である所属した部隊が水木を残して壊滅するシーンが描かれないまま中断される。1985 年に『娘に語るお父さんの戦記・絵本版』として続きが描かれ，それが「ラバウル戦記　その三」となる。さらに，絵だけであったものに 1994 年に水木自身が解説の文章を付け加えて出版されたのが『ラバウル戦記』である。同書には終戦直後，日本に戻る間に描かれたスケッチである「トーマの日々」も収録されている。主要な部分を占める「ラバウル戦記」の「その一」から「その三」はページの上半分が絵で下半分が文章になった絵物語である。ただし，描かれた年代が異なることもあり，「その一」「その二」と「その三」，そして「トーマの日々」ではかなり異なるタッチの絵になっている[2)]。

『ラバウル戦記』は戦地での水木をはじめとする兵士の日常が描かれる。初年兵として太平洋戦争の前線に送られることになった水木は，軍隊内の不平等な関係の中でいじめられ，過酷な作業をさせられる。軍事的なことに何の興味もなかった水木は，ことあるごとに古兵によってビンタされ，なぐられる。水木は「初年兵というのは“人間”ではないのだ」と記している（水木 1997：65）。しかし，一方で水木は「毎日面白いのだ」とも書く。水木が「面白い」と感じたものの一つが現地の自然である。「ジャングルの木の葉の色が生き生きとしており，鳥や虫もたくさんいたから，そういうものがなんとなくぼくの気持ちを“たのしく”したのかもしれない」（水木 1997：37）。とはいえ，水木がいるのは戦地，それも前線であり，迫り来る死の予感も感じる。「ラバウル戦記　その二」の最後には「今までに経験したことのない“不気味”さに兵隊は誰も話をしないし，なぜか話をしてもヒソヒソ声になるのだった」（水木 1997：138）とあり，その後，水木の所属していた部隊は水木を残して全滅し，自身も左腕を失う。

軍隊内での不平等な関係とは対照的に，水木と現地の人々は対等な関係で描かれる。水木はしばしば，現地の人々の村を訪れる。後年，水木は以下のように振り返っている。「毎日，軍隊で最下級の兵隊でいじめられていたから，この“土人”たちの生活は“天国”に見えてしまった。いや，もともと“土人の生活”というのは好きなのだ」（水木 2002: 126）。水木のいう「土人」とは，「文字通り，土と共に生きている素晴らしい“土の人”という尊敬の

意味」（水木 1997：34）である。軍隊の中で人間扱いされない初年兵だった水木は，「トライの方々のほうが日本人より人間本来の姿に近いのではないか，と思っていた」（水木 2002：150）と記している。

水木は軍隊で支給された煙草を現地の人々と交換して食べ物を手にいれる。水木自身が“いやしい”ほど食べるが軍隊では限られた食料しか提供されなかったこともあり，現地の人々から得られる果物などは貴重であった。『ラバウル戦記』では，現地の人々に囲まれて，軍服を着てメガネをかけた水木が食べる様子が描かれている（水木 1997：35）。水木は交換を通じて，現地の人々との関係を作り上げていく。「よく笑い，夕食などいっしょに食べていると“大満足”だった」と記している。そして，そこでは言葉はあまり重要ではないという。水木は英語があまりできなかったが，数少ない単語で意思疎通を図ったようだ。そして，「トモダチになった」，「気が合った」のだという（水木 1997：35）。

次第に現地の人々との交換ではなく，現地の人々から贈与される様子が描写されるようになる。水木がマラリアで苦しんでいる時には，バナナやパイナップルなどを調理したものを持ってきてくれ，2，3 カ月ほど毎日もらい続けたという（水木 1997：168）。他方の水木は「運んでくれる土人の子たちに何かやろうと思ったが，何もなかった」として特に返礼を行なっていない。また，別の日には自分用の畑も用意してくれていたという。後年，水木は中古の自動車を彼らにプレゼントするが，そこで「やっと昔の恩が返ってきた」といわれたとあり，それまでいかに一方的に贈与されてきたのかが推察される。

水木と現地の人々とのこうした関係が形成された背景には，水木による現地の人々と文化に対する憧憬や好奇心がある。後年，水木は文化人類学にも関心を示し，この地に移住し「不思議なことを調べたかった」とも書いている。とりわけ，水木はトライ族（トーライ族）の踊りに感動しており，「踊りはものすごい迫力だ。大勢が大地を踏みならす地ひびきが内臓にしみわたり，またたまらない。頭には，色々な色をしたワニだとか鳥みたいなものを作ってかぶり，歌うというより絶叫する。ぼくも思わず『キャーッ』という日本人ばなれのした声が出るのをどうすることもできなかった。体も自然に動き，ふり向くと土人たちが笑っている。緑色のジャングルの中の踊りは，これこそ芸術というものだろう。ぼくはもうすっかり踊りに酔ってしまって，ここに住もうという気になってしまった」（水木 1997：169）と記している。

ただし，水木と現地の人々との出会いがすべて友好的なものだったわけではなく，現地の人々が敵のスパイであったり，あるいは緊迫した関係になったりすることも描かれる。さらに，いくら「人間ではない」二等兵であったとはいえ，水木が軍隊としての特権を持つ立場にあったこと（西野 2019），現地の人々が日本軍を恐れていたことが，両者の交流の背景にあったことは否定しえない（岩本 2002：24）。しかし，だからといって両者の関係性の全てを軍を背景にしたものだととらえることもできない。水木の部隊の中でも受け入れられてい

たのは水木だけで，ほかの兵隊は追い払われていたという（岩本 2002：24）。

現地の人々と水木との関係が概して友好的なものであったことはその描写から伝わってくる。漫画家のヤマザキマリは，『ラバウル戦記』に関して，「戦地における日常生活」や「現地の人とのたくさんの交流」が描かれており，「戦争よりもそっちの実生活や人間の不条理性」を「観察している方が楽しそう」と論じる。さらに，ヤマザキは「原住民の人たちの暮らし」と「侵入してきた戦争」に「翻弄される人々の観察記録」といった「対峙する二つの人間の生き方」が「たわいもない出来事を添えることによって余計客観性を増していく」と論じる[3)]。

ヤマザキマリが指摘した「たわいもない出来事」という点は，人類学者の奥野克巳（2020）による「マンガ人類学」の議論と重なる。奥野は文字を主体にした民族誌とは異なり，「人類学マンガ」によって「実生活の不可量的部分」に接近することが可能になると論じる（奥野 2020：234）。「実生活の不可量的部分」とはマリノフスキ（2010：56）が人類学的なフィールドワークにおいて重視したもので，「社会の骨組み」ではなく，「血肉」にあたる部分である。奥野が引用するようにマリノフスキはそれを「平日のありふれた出来事，身じたく，料理や食事の作法，村の焚き火の回りでの社交生活や会話の調子，人々のあいだの強い敵意や友情，共感や嫌悪，個人的な虚栄と野心とが個人の行動に現れ，彼の周囲の人々にどのような気持ちの反応を与えるかという，微妙な，しかし，とりちがえのない現象――などのこまごまとしたことが，これに属する」と説明する（マリノフスキ 2010：56）。それこそが「現地の内側から実生活に接近したときに見えてくる，『人間生活の現実』」であり（奥野 2020：216），民族誌では捨象されてしまった「平凡で，ありふれた日常の連続」としての「フィールドワークの風景」である（奥野 2020：208）。奥野は「無味乾燥な空間描写に時間感覚を注ぎ込み，人間の五感に関わるモノや行為を投入することによって，マンガには現実の『血肉』の部分が浮き上がってくる」（奥野 2020：234）と論じる。

3. ホームステイと表現すること

人類学者の調査法がフィールドワークであるならば，ナツのそれはホームステイである。ナツの漫画である『南の島の異邦人』の「はじめに」でも，自らを「南の島ホームステイフリーク」と名乗っている。ナツにとってホームステイは「どう生きるのか」を考えるための重要な方法である。別の場所でナツは「いつごろからか，わたしの旅はひとつの村に数週間以上の長期，それもホームステイを基本とするようになった。行った先で，ホームステイ先を探す。そこに住む人びとのナマの暮らしをともに体験し，そして喜怒哀楽を分かちあう――それがわたしの旅の喜び，そして目的になってきたのだ」（もんでん 2010：40）と説明する。ナツのホームステイは人々とともに暮らすことであり，「暮らしを手で作るという営

み」（もんでん 2010：46）をともに行うことであるという。

フィールドワーク中の人類学者の多くも，特定の家族にこの意味でホームステイをし，その点については民族誌の端で言及されるだろう。しかし，人類学者の調査法がホームステイと語られることはなく，彼らのホームステイ先での経験はその社会の何がしかを示すものとしてやや一般化されて語られる。ナツと同じくツバルに長期で滞在した人類学者の中には，島の全ての人々となるべく平等に付き合おうとして，一つの家族にホームステイするのではなく，自らの家をコミュニティによって建ててもらい，島全体の中で完全に中立的な立場に立とうとした者もいる（Chambers and Chambers 2001）。人類学者にとっては，ある特定の家族との関係を強調するホームステイではなくフィールドワークと称するのには，当該の社会や文化などのそれよりも一般化された全体性を明らかにしようとするためであり，そのためにある家族に世話になっているに過ぎないと位置付けているからであろう。『南の島の異邦人』をはじめとするナツの著作には，文化や社会一般についての説明もあるが，人類学者のそれとは異なり，中心になるのは暮らしを共有する家族であり，その視点から島の様子が描かれる。

ナツにとって，体験することとそれを何らかのかたちで表現することとは密接な結びつきをもってきた。人類学者が主に論文や民族誌を書くのに対して，ナツは多様な形で発信している。ナツは，広告企画，ショップ用看板やデザイン，英語教師，日本語教師，翻訳業などさまざまな仕事をしてきたが，「描く」ことに最も大きな思い入れがあり，これまでの「仕事」として，壁絵，看板，広告やチラシ，タイルアートなどもある。2004 年 3 月に書いた自己紹介の中で，自らの「ライフワーク」を「青い海の南の島々へ行っては，異文化と民族美の探究をする」こととする。そして，「ある賢い友人」に提案されて，その「ライフワーク」を発信することからはじめた[4)]。こうしてできあがったのが「ナツ―もんでん奈津代―の南の島子連れ滞在記―サモアのビックリ暮らしと子育て」（以下，「サモア滞在記」と略す）というウェブサイトであり[5)]，現在のナツへとつながる仕事の中で最も重要なものの一つである。それは，2002 年に 3 ヶ月間，1 歳の娘とサモアに滞在した時の様子が写真と文章，そしてイラストによって記された「子育て・異文化体験記」，「旅行記というより，ディープな暮らしの記」である。ただし，サモア滞在記を書き始めたのは帰国から 1 年も経った後であった。日本への帰国後，日本の社会文化に適応するのに苦労したり，日本で生活していく上での様々な課題に直面したりしていたためである。

サモアの次に紆余曲折を経て辿り着いたのがツバルである。渡航前に「今の具体的な目標」として，「できるだけ長期滞在し，その文化を研究，人々の生き方を見つめ，そして表現すること」とあり，サモアでの経験を通して，すでに知ることと表現することが両輪のようになっている。とはいえ，体験することと表現することは，確固とした形をとっていたというよりは，それをどのように自分が暮らすための収入へとつなげていくのかという問題と

も関連しながら，常にその具体的なあり方を考え続けてきた。サモア滞在記の「大切なあとがき」にも，「南の海の文化と自分の『描く』＆『書く』仕事を結びつけた将来を模索中」とある。サモアの後のツバル滞在でもその模索が続いていくと考えた方が適切であろう。2004 年に 4 歳になった娘と今度はツバルに滞在し始めると，「ナツ―もんでん奈津代―の子連れの南の島暮らし　天国に一番近い島　ツバルにて」というウェブサイトでの掲載がはじまる。表現方法はサモア滞在記とほぼ同じで，写真と文章，イラストの組み合わせになっている。サモア滞在は一度だけであったが，ツバルには 2004 年から現在に至るまで何度も長期での滞在を繰り返してきており，はじめは離島の一つのバイツプ島であったが，より伝統的な暮らしが残るといわれるナヌマンガ島へと主な滞在先が変わった。滞在の度にウェブサイトの内容が拡充されてきており，2004 年から 2006 年にかけて「初めてのツバル滞在実況写真」，「こども」，「ツバルに暮らし」，「ツバル特選写真集」からはじまり，「ナヌマンガ 2008 年の日記―2008 年のナヌマンガ島から―」，「ナヌマンガ島の日の出　バイツプ島の夕暮れ―2010 年，2011 年の離島の暮らし―」，「2013 年の離島の暮らしから―写真集」，「2016 年　南の人名録」へ続き，「2019 年　4 コマまんが『南の島の異邦人』」へと至る。

ウェブサイト以外にも，2008 年にはツバルでの言語習得の経験を踏まえて『ツバル語会話入門』（ナツ 2008）という語学書を刊行したほか，2010 年には『子連れ南の島暮らし――南太平洋のゆる～り子育て体験記』（もんでん 2010）としてそれまでの滞在を子育てという点を中心にまとめた「体験記」を出版している。これまでナツが発表してきたものは，「体験記」，「滞在記」，「異文化エッセイ」，「ルポ」，「人名録」などと名付けられているが，それらの多くは文章と写真を中心にしたものであり，そこにイラストや漫画が描かれることも多い。例えば，ウェブサイトで発表した「ナヌマンガ 2008 年の日記―2008 年のナヌマンガ島から―」[6] では写真と文章の下に 12 コマの漫画が描かれている。しかし，それらは，文章やイラスト，写真とともに描かれたもので，漫画だけでまとまった形で公表するのは『南の島の異邦人』が初めてである[7]。

『南の島の異邦人』は，2019 年 8 月末から 2020 年 6 月初頭にかけて，配信サイト note にて全 80 話公開された[8]。「4 コマまんが」ともあるが，実際には 1 話あたり 4 コマから 8 コマ程で，付随して関連する写真や簡単な説明，執筆したウェブサイトへのリンクなどが続く。それぞれの話は独立しているというよりはゆるやかにつながっており，3 話ほど連続して同じテーマで描かれるものもある。全 80 話が「最初の日々」（計 20 話），「真ん中の日々」（計 40 話），「終わりの日々」（計 20 話）の 3 つに分けられており，これに「はじめに」と「あとがき」が足されている。以下，『南の島の異邦人』を引用する際には「はじめに」，「最初」，「真ん中」，「終わり」，「あとがき」と省略し，「最初」「真ん中」「終わり」に関してはそれぞれの話数をつけて（最初 5）のように示す。

『南の島の異邦人』は，2019 年の 8 ヶ月間のナヌマンガ島での暮らしに基づく「細部まで

実話のマンガ」である。主な登場人物は，「異邦人」である著者のナツとナヌマンガ島に住むアセナティ母ちゃんとウィニ父ちゃんの家族である。「あとがき」には，アセナティ母ちゃんたちと出会う前のことは『子連れ南の島暮らし』（ナツ 2010）に書いてあると説明されており，『南の島の異邦人』は同書の続編として読むこともできる。ナツは，これまでツバルには娘さんと一緒に滞在してきており，そのことが『子連れ南の島暮らし』にまとめられている。一方で，近年は一人で滞在するようになっており，『南の島の異邦人』の基になった 2019 年の滞在はナツ一人での滞在の 2 回目であるという。内容はこれまでの滞在の経験やすでにウェブサイトで発表されたものを踏まえつつも，「南の島」には縁のなかった人に対しても気軽に読んでもらえることを念頭に描かれているという。

4. 言葉とコトバ，そして身体

『南の島の異邦人』には「［ツバルの人々と］仲間になるにはコトバを覚えないと，と頑張ってた以前のわたし…」という「モノローグ（心の声）」がある（真ん中 15）。そもそも，ナツは言葉を専門とする。肩書きとしてよく使う「南太平洋生活研究家」の隣にツバル語通訳とも書かれることも多く，ほかにも英語教師，日本語教師をしてきた経歴もある。謙遜して「言語学者のはしくれ」ともあるが，ナツが刊行した『ツバル語会話入門』（ナツ 2008）は現在までのところ日本語で書かれた唯一のツバル語の本である。英語で出版されたツバル語の本（Besnier 2000）は文法を中心にツバル語を体系的に説明したものになっているのに対して，ナツの本は現地で人々が発した言葉をそのまま伝えようとすることに重きが置かれる。『ツバル語会話入門』には，「筆者がツバルに暮らし，毎日のツバル人との会話の中で，その場で書き取って覚えたものばかりを例文に挙げています。つまり，すべての例文は，実際にツバル人が筆者の真横で使った表現です」（ナツ 2008：4）とある。同書を読んでいくと初学者が現地に滞在した時にツバル語を覚えていく過程，あるいはナツがツバル語を習得していった過程を辿ることができるものにもなっている。同書の最後には「人びととの深い交わりの基盤となるのは，言葉です」（ナツ 2008：113）と簡潔に言葉への信頼のようなものが示されている。

『南の島の異邦人』では，日本語を覚えるツバル人の描写がある。カタカナでツバル人の人名を記録しているのを偶然目にしたガノアという若い女性に，ナツはカタカナの表記の仕方を教える。新しい知識に触れたガノアが「アハハハハッ」と思わず笑い，ナツは「この笑顔がたまりません」という。そして，次の日，ガノアが家族の名前をカタカナで書いてみせにくると，ナツは「スバラシイ…！」と感動する（終わり 16）。ガノアの姿に自らが新しい言葉を覚える時に感じてきた新鮮な喜びを重ね合わせているのかもしれない。

しかし，興味深いことに，言葉を使ったコミュニケーションの限界もまた示されている。

それは，エレナという日本に住むスペイン人女性がナヌマンガ島へ来た時の話において描かれる。彼女はよく笑い，そして踊ることで，島の人々と「仲間」になった。他方のナツは「常にノート片手に」言葉を聞き取ってそれを覚えようとしてきたという。本節の冒頭で引用した「［ツバルの人々と］仲間になるにはコトバを覚えないと，と頑張ってた以前のわたし…」というモノローグは，エレナのやり方にハッと気付かされて「ああ…でも。こんな方法もあったんだ…」と続く（真ん中 15）。「人びととの深い交わりの基盤」として言葉が位置づけられていた『ツバル語会話入門』（ナツ 2008）とは異なり，『南の島の異邦人』では言葉に対して複雑な態度を取っている。

『南の島の異邦人』では，冒頭の「はじめの日々」から言葉への不信のようなものも示されている。目的地であるナヌマンガ島に行く途中で立ち寄った別の離島で，同じ船で来た人に「オレ，この島　知んねえ」といわれて，自分が案内しようとすると，実はこの島の人で自分の母親を紹介してもらうといったもので，「ツバル人は冗談好き」というオチがつく（最初 3）。ほかにも，「露骨」に性的な言葉で相手を批判することや，日本語での性的な言葉を冗談でナツに投げかけてくる様子も描かれている。人々は「許容範囲がムチャ広い」としているが，ナツは「ホンキで嫌」という（真ん中 26）。さらに，言葉が「深い交わりの基盤」ではなく，表面的な交わりになってしまうことも示される。ある「親しくない人」が『ツバル語会話入門』と思われる本を指しながら，「ナツ，この島のこと書いてもうけてんでしょ。分け前ちょうだいよ」といってきた。ナツはその言葉に傷つく。興味深いことにそれに対してナツは表情が消えた顔で「ツバルについての執筆は出費のほうが多いんだよ。日本での生活だって，英語教師と障がい者介助でやってるんだよ」と流暢に回答している姿が描かれる（真ん中 27）。

言葉が取り交わされる場面において，その言葉自体にはとりわけ意味がないことを示す話もある。すれ違いざまに「また海？」，「豚小屋の帰り？」などの「短い質問」が挨拶がわりになされる（真ん中 28）。また，ナヌマンガ島でも Wi-Fi が通じるようになり，スマホを通じて首都の島にいる家族や親族と会話することができるようになったが，「今　ナニしてんの」，「べつに～」といった「かなり，どうでもいい会話」が行われている。それをナツは「家族や親戚とのつながりを何より大切にする」ものと説明する（真ん中 23）。

『南の島の異邦人』は言葉の限界を示しつつ，言葉を通して伝えられる何かを描こうとしているのだろう。それは，批評家の若松英輔がいうコトバとしてとらえることができる。若松は哲学者・言語学者・イスラム学者である井筒俊彦が「文字や声で感覚できる元としての言葉とは異なる意味の顕われ」をコトバといい，それを自己の哲学の核に据えたと論じる。そして，多くの人にとってコトバは言葉だが，画家にとってそれは色や線になり，音楽にとっては旋律や和音，彫刻家にとっては形や姿がコトバになるという。また，宮沢賢治の「無声慟哭」という詩では，言葉にならない慟哭が余白と沈黙というコトバで「歌い上げ」られ

ているという。だからこそ，「言葉だけでなく，そこにコトバを感じなくてはならない」というのだ。そして，そのためには「書かれたことだけでなく，書かなかったこと，書き得なかったことを受け取ろうと静かに読みを深める」必要がある（若松 2021）。

『南の島の異邦人』は，言葉の限界を描いているだけでなく，「言葉果つるところ」（石牟礼・鶴見 2002）で，言葉にならないコトバを描こうとしているのではないだろうか。その点で注目すべきは，アセナティ母ちゃんの孫（娘の息子）である 2 歳児のヨセファとの別れの情景である。ナツは，「自分の子ではない幼い子どもと共に暮らせる…人生の宝物です…」と説明するなど，このヨセファとも家族的な関係を取り結ぶ。だからこそ，日本に帰る際には，「幼い子には特に正直に説明せんとな」として，「遠い国に行くんだ」，「ヨセファがもちっと大きくなる頃また戻ってくる」と，きちんと伝えようとする。幼いヨセファにはその言葉が正確に伝わったかどうかわからないが，それでも彼は「一生懸命理解しようとする」（終わり 17）。ナツが船に乗って島を去る日の朝，幼稚園が大好きなヨセファであるが何度も幼稚園から帰ってきてはナツのところに来る。いつもは寝ている昼寝の時間も寝ようとしない。それが意味することにナツは船に乗った後にようやく気づく（終わり 19）。言葉にならないコトバに気づいた時，彼はもうそこにはいない。

「深い交わり」を示すときに，言葉はむしろ後景に退く。それは，ナツがナヌマンガ島を去る前日の話にもみることができる。アセナティ母ちゃんと「もう荷造りはいいのかい」，「うん　もうできた」，「―また，2 年後だね…」，「うん。―お互い生きてたらね」というたわいない会話がなされる中で，ふと空にカタファ鳥（軍艦鳥）が群れで飛んでいるのがみえ，二人でそれを眺めている姿が描かれる。そこに「赤の他人だったわたし達。もう今で 10 年も…ときどき数ヶ月という時間をともに暮らす」，「この日，アセナティと眺めた夕焼けを渡るカタファ鳥―」，「日本に帰った今も夕暮れ時に，よく思い出します―」というモノローグが加わるが，彼女らの間に言葉はない。とても味わい深い描写である（終わり 18）。

『南の島の異邦人』ではコトバは身体に現れる。この点は，ナツが一緒に暮らすアセナティ母ちゃんとフアリアという知的な障がいがある娘との関わりに端的に現れている。アセナティ母ちゃんはフアリアに対して，「役たたず」といった「乱暴」な言葉をぶつける。しかし，「フアリアが病気になると夜通し寝ないでマッサージする―。」として，寝ているフアリアの胸と腹を黙ってマッサージしている姿が描かれる。さらに，泣いているフアリアに食べ物が入ったホカホカの鍋を持っていく様子へと続く（終わり 6）。登場人物の言葉はない。しかし，身体がコトバを伝えている。

『南の島の異邦人』では，身体によってさまざまなことが語られる。朝早くから仕事を続けるアセナティ母ちゃんの身体はまるみを帯びつつも，力強い独特の曲線で描かれる。ナツはアセナティ母ちゃんに習って「『島の暮らし』修行」をしており，ゴザやカゴなどを編んでいる。しかし，ナツは「一生懸命」頑張るが，それについていくことができない。「アセ

ナティ母ちゃん」と題された話の最後のコマでは，下の方に「全身筋肉痛」によって寝ているナツの姿と，後方で座りながら作業を続けるアセナティ母ちゃんの姿が対照的に描かれる（最初 12）。

人々の感情もまた身体的に表現されている。妻を亡くしたばかりのタウレレイ老人は「湿疹だらけ」になっており，「かゆくて夜眠れんのだ」という。キアナコおばが薬草を基に湿疹の薬を作り，娘がそれをタウレレイ老人にかけている姿を描写し，身体が家族によってケアされていることが示される。そんなある日，タウレレイ老人が森の中にある妻の墓の横で昼寝している姿が目撃される。森には蚊が多く，そこで昼寝することで体中が刺されて，湿疹だらけになってしまったのである。妻を亡くしたことへの悲しみ，あるいは妻を悼む思いの深さが，湿疹だらけの身体として現れているといえよう（真ん中 22）。

眼差しもコトバを伝える。キリスト教徒が大半を占めるツバルでは，毎夕，決まった時間に家族で，聖歌を歌い，祈りを捧げる。フェシリおばあちゃんが居合わせる時は，必ずナツの方に「ほほ笑んでずっとこっちを見つめて」，「分かりやすい口の動きでうたってくれるのだ…」という。それをナツは「ああ…みまもられるって…こんなにあったかいんだなぁ」と受け止める（真ん中 19）。

身体を通して伝えられるコトバは，出会いと別れに最もよく現れている。冒頭でのウィニ父ちゃんとの再会はやや遠景でハグ（抱擁）が描かれている。知的な障がいがあるフアリアとの再会のハグで，フアリアは「よだれ」を通してコトバを伝える（最初 7）。ナツにとって最も大切な人の一人であるアセナティ母ちゃんは出会いではなく，別れの場面でハグが描かれる。離島であるナヌマンガ島から日本に帰国するためには，月に何度か寄港する貨客船に乗る必要がある。積荷の上げ下ろしが終わり次第船が出航するので，いつになるのか直前にならないとわからない。いざ出航となると急いで船に乗り込む必要があり，突然の別れになる。貨客船に向かう小型のボートに乗り込む直前，ナツはアセナティ母ちゃんに「ガシッ」と腕を掴まれ，「ギュウウウウウ」と抱かれる姿が描かれ，思わずナツは「あ…」と心の中で思う。次のコマは背景が黒くなり，その抱き合うシーンのまま人物の動きが止まる。そして，「本当に力強く，抱きしめてくれた—」というモノローグが入る。一瞬だが，時が止まったかのように感じていることが示されているのかもしれない。次のコマではもう船の上からみたであろう遠景で輪郭くらいしかわからないアセナティ母ちゃんが片方の手でヨセファの手を握り，もう片方の手を振っている（終わり 20）。

5. 与える

コトバは食べ物を与えるという行為にも現れる。『南の島の異邦人』には，言葉が通じない時のことについて以下のような興味深い描写がある。ツバル語がわからないフィジー人教

師であるアンディの話である。ナツとアセナティ母ちゃんが外でパンダナスの葉で何か作業をしていると，アンディがやってくる。ナツがアンディと英語で会話していると，いつの間にかアセナティ母ちゃんがどこかに行ってしまう。ナツは「会話ワカンなくてつまんなかった？」と不安になるが，パンノキの実と飛び魚の干物を持って帰ってくる。パンノキの実を炭焼きにして，一緒に食べる。飛魚の干物はお隣りからもらってきたことが説明される。アセナティ母ちゃんは「アンディ，せっかく来たから…」，「なんかこう，ファカアロファだから」という。それを受けて，ナツは「ファカアロファ」は「気の毒に」とも訳しうるだろうが，「でも，もっと大きくてあったかい」，「アロファは『愛』とか，『相手への思い』という意味。『なんかしてあげたい』という気持ちなのだ」という。漫画の下には，アセナティ母ちゃんが 30 分かけて村まで往復してきたことが説明される。そして，「ツバルの人々の心が，わたしが想定するよりもずっと大きくてハッとする，こういうことが，今も時々あります」として，ツバルの人々の「相手への思い」に改めて心を動かされる（真ん中 13）。

食べ物をはじめとするモノが与えられたり，あるいは共有されたりすることは『南の島の異邦人』を通して描かれる。それは，冒頭の「最初の日々」におけるナツの手土産から始まる。ナツは首都フナフチ環礁にある中国人商店にて，毎回，日用品を買い込んで，それを離島に持っていくという（最初 1）。毎回とあるので，今回も何かしらの日用品をお土産として購入しているのだろうが，今回の滞在でナツが何を買ったのかや，誰に渡しているのかは描かれていない。

ナツが何を与えたのかは明示されないが，何を与えられたのかは詳細に描かれる。島で出迎えてくれたアセナティ母ちゃんは鶏をつぶして待っていてくれたという（最初 7）。鶏は自分たちで育てた島の食べ物である。外から来たナツが資本主義経済の中でモノを調達した一方で，島の人であるアセナティ母ちゃんは自給自足的な生活の中で自らつくり出した食べ物を渡すという対照になっている。あるいは，外部から来たナツが，島の食べ物を分けられることによって，改めて家族として迎え入れられ，再び島の人になることを示しているともとらえることができる。

食べ物を与えられることで改めて家族として迎え入れられ，そして島の人になったナツは，今度は自ら食べ物を与える側に回る。まず，アセナティ母ちゃんに対して，大好物である熟したパンノキの実を渡す。パンノキの実は通常は加熱して調理するが，熟すと果物として生で食べることができる。木の上になっているままで熟したパンノキの実はやがて木から落ちてくる。これを拾って食べるのだが，すぐに拾わないと鶏につつかれてしまう。ナツは「ボン」という音が外から聞こえると，自分の仕事を中断して，すぐに家の外に出て拾いに走る（最初 14）。皮を洗い落として，アセナティ母ちゃんに食べてもらうのだが，ふとこの役割は 2 年前の前回の滞在の時には，ハイチアという末っ子が担っていたことを思い出す（最初 13）。熟したパンノキの実の話が子どもによる共有を示すのであれば，パンノキの種は一人

前あるいは伝統を実践する島の人としての共有だととらえることができるかもしれない。パンノキの実には大きな種があり，かつてはそれを焼いて食べていたという話を聞いたナツは種を大量に集めて茹でて，家族や島の人に食べさせる（最初 15，16）。

共有されるのは食べ物だけではない。「最初の日々」には，ウィニ父ちゃんが以前つくったカヌーがすでに他者の手に渡っていることが描かれる。ウィニ父ちゃんは 2 年前，毎日少しずつ 3 ヶ月以上もかけて自分でカヌーをつくり上げ，それに乗ってマグロやカツオをたくさん釣っていた。今回の滞在でナツはウィニ父ちゃんがそれを当たり前のように首都フナフチ環礁在住のイトコにあげてしまったことを聞かされる（最初 19）。ショックを受けるナツであるが，それは思い違いで本当は 2 年前のカヌーは「サモアのおじがほしいってんで，あげんたんや」と聞かされ，フナフチに送ったカヌーは，その後にまた作ったものであることが告げられて，さらに驚く（最初 20）。島の当たり前を改めて思い知らされるこの話は「最初の日々」の最後にふさわしいものである。

「真ん中の日々」では資本主義経済が浸透する中でも，ものが共有されていることが描かれる。かつては，漁撈で取れた魚は自分たちの家族で食べるほか，親族や近隣の家族に分けられていたが，現在ではカツオやマグロなどの大型の魚は，島の中で売り買いされることも珍しくない。人々は魚が取れたという噂を聞きつけると，買いに走る。島の中では知り合い同士なので支払いはツケで後日でも大丈夫であるが，売り買いされることには変わりない。しかし，商品になりえるものが共有されることもある。「大量だったら，時々，タダでまわってくる」と説明され，「ご近所よしみ」という言葉とともにカツオかマグロがおもむろに渡される様子が描かれる。資本主義経済が浸透しつつも，こうした分かち合いが失われてしまったわけではないことが示される（真ん中 1）。

現金もまた共有される。ツバルでは必要とされる時にお金を持っている者が払う。たまたま現金を持ち合わせていなかった場合はその場の誰かが払ってくれればそれでいいのであり，後でお金を渡して精算する必要はない。ナツが支払いを忘れていた時，アセナティ母ちゃんが代わりにそれを支払った。それに気づいたナツがあとでアセナティ母ちゃんにお金を渡そうとすると，「いや，もう払ったからいいんだよ」といわれる。「お金は，必要なときに，誰かがだせば，それでいい，って感じ」と説明される（真ん中 2）。他方で，ナツがお金を持っている時には家族が期待してしまう。アセナティ母ちゃんは「帰りの旅のために，お金節約しなよ！」というのに対して，「おおらか」なウィニ父ちゃんは遠慮することなく「ハンモックもうひとつ編みたいな～♫」とナツに紐を買ってくるようねだる（真ん中 3）。

さて，旅の初めに与えられたのが鶏という島の食べ物であるのならば，旅の終わりに与えられるのは島の植物でつくられたゴザである。ゴザ編みはナツが「『島の暮らし』修行」として行っているが，それはかなりの重労働である。先述したスペイン人女性のエレナが去る 5 日前から，彼女に持たせるためにアセナティ母ちゃんがゴザ編みを始め，朝から晩までず

っとゴザを編み続ける。ナツはそれを「家の女がゴザ編みマシーンになる」と表現する。残り少ない日々を「エレナと一緒にすごしてほしいが…」と思う一方で，「―それでいいのです」として受け入れる（真ん中 18）。

「終わりの日々」では分かち合いがなされていないことについても注目している。「島のスモーカー達」と題された話では，タバコが島からなくなっていく時の状況が描かれている。ツバルの離島は貨客船が月に 2 回ほど寄港し，人と物資が運ばれるが，天候によって欠航となることも多く，そうなると輸入品が著しく欠乏する。タバコもその一つであり，欠航が続くと島の喫煙者たちは隠れて吸うようになるとし，「他の奴に見つかったらたかられるからな…」と発言する老人が描かれ，「島の『分かち合い文化』，中毒の前には脆くも崩れ去る…」と説明される。島からタバコがなくなったある日，島の若者が小屋の床下に潜り込んで，ウィニ父ちゃんの吸ったタバコの吸い殻を集めている姿を目撃してしまったナツは，それを「なんか…人間の，一番悲しい姿を…見てしまった…」と表現する（終わり 13）。

『南の島の異邦人』では，ウィニ父ちゃんがモノを当たり前のように共有している姿が描かれる。彼はつくったカヌーを立て続けに 2 艘あげてしまったと平然という。その代わり，自分もまたナツに買って欲しいものをためらうことなくいう。アセナティ母ちゃんの場合は他者のためにモノを与える様子が描かれる。アセナティ母ちゃんはナツのために鶏をつぶし，フィジー人教師アンディのために食べ物を持ってきて，エレナのためにゴザを編む。彼女が人に何かを与える時，心なしかうれしそうな表情をしている。ナツの場合は，アセナティ母ちゃんに似ているが，誰かに与えようとすることで，反対に自分自身が何かを与えられる点が強調されているようにみえる。

その点を示すのが，カニを取る話である。ツバルでは森にいる陸棲のカニをつかまえて，甲羅に削ったココナツを詰めて煮る。そうすると，カニミソにココナツミルクの味が加わって「ウマいっ…!」のである。カニを取ったり，それを調理したり，さらにはそれを食べるのにも大変手間がかかるが，現地で大変好まれる食べ物である。ナツは先述のエレナのために，アセナティ母ちゃんとともに森にカニ取りに行く。アセナティ母ちゃんは足をくじいてしまっているので「指揮役」となり，代わりにナツが奮闘する。エレナにカニを食べさせてあげたいという強い思いによって，「今までで一番よくとれた」と，泥まみれになりながら，カニをとるコマが描かれる。「『動機づけ』ってのは，本当にすごい力です」と最後に説明される。これは，自分のためではなく，誰かのためにやることによって力が与えられるということだろう（真ん中 17）。

何かを与えることで，反対に何かを与えられることを示す話はほかにもある。先述のアセナティ母ちゃんの娘の一人であるフアリアが下痢を患っているため，ナツは伝統的な薬草として用いるためにパンダナスの支柱根を切りに行く。その日のナツは起きた時から体調が悪かったが，パンダナスの根を切りながらナツは「……あ‥」，「またアタシ，元気になってい

る」と感じる。ナツは知的な障がいがあるフアリアの世話をする。そして，「疲れるんだけどな～でも元気になるんだよな～」，「キミといると」と語られる（真ん中 33)[9]。

6. 狩猟採集の暮らし

『南の島の異邦人』では，ほかにもナツが元気を取り戻す様子が描かれている。「真ん中の日々」の「海」という題の話では，心が疲れた時ナツは島の北の端に行くことが記される。そこは「水平線が 180 度以上だだーっと広がる太平洋のどまんなか」であり，「果てしなく続く」，「海が胎動する波の音」が聞こえるという。ナツはそこで貝を拾ったり波と遊んだりする。そうすると「自分が自然のひとかけら以外の何者でもないことを，圧倒的な深さで納得させられるのです」という（真ん中 28)。自然とのつながりの中で何かを与えられてナツが回復する，というように読むことができる。

この点は，ラウルーという野草を摘みに森に行く時の話にも伺うことができる。4 節で，ある「親しくない人」から「この島のこと書いてもうけてんでしょ。分け前ちょうだいよ」といわれたことに傷つき，「ツバルについての執筆は出費のほうが多いんだよ。日本での生活だって，英語教師と障がい者介助でやってるんだよ」と反論したことを紹介した。その後も，ナツは「月 10 万円そこそこの収入で家賃食費やりくりして『もうけてる』っていわれるってどうよ…」と，誤解されたことに落ち込み続ける（真ん中 27)。「親しくない人」からもうけてるといわれたことで，ナツも経済的な利益を生むかどうかということを前提とした回答をしている。しかし，「親しくない人」の誤解とは，ナツが実際にはもうけていないのにもうけているととらえたことではなく，ナツをもうけてるかどうかでとらえてしまっていたことにある。

その後，ナツは森へ行き，ラウルーという野草を摘みにいくことで，回復していく。「森の中は朽ちた椰子の実や倒木で鬱蒼としている」ため，「集中しないと，一歩を間違うと足をくじく」危険がある。そこはまさに自然の領域である。そして，プカやフェタウの木の下で「無心に葉をプチプチと摘んで頂く」。そうすると，不思議なことに「ただ生きている喜び」が「ゆっくりと身体に湧いてくる」というのである。ナツはラウルーを「摘んで頂く」と表現しているが，それは自然の恵みを受け取るものであるといえよう。最後のコマで，こうした狩猟採集の暮らしには「精神病理がない」と説明され，ナツがラウルーを使った料理だと思われるものをヨセファに食べさせている。傍にはフアリアもいる（真ん中 27)。自然から与えられたものを他者に与えている。

「真ん中の日々」の「島はすごいぞぉ！」という題の話では，食べ物を介した自然とのつながりの重要性について描かれている。ツバルでは，普段は輸入食品に頼っているが，船便の欠航によって，自然とつながる暮らしへと戻る。島では今でも豊かな自然が人々の暮らし

を支えており，それは2ヶ月ほど流通が滞ったとしても「『食の豊かさ』はビクともしない」。そして，島の人々が「腹の底からよく笑う」ことは「自然の底力と深くつながっている」からである。ナツはそれを「この島の安心感に包まれている」とも表現する。他方で，自然とのつながりが失われつつある首都のフナフチ環礁では「神経症」が増加しているという。それは「『食』を生む自然がなくなった地で」，「息をしていることが見えない根底にはある…」という（真ん中36）。

「終わりの日々」の最後の話に「狩猟採集の暮らしを学ばせてもらう島―」（終わり20）とあるように，『南の島の異邦人』では，ツバルで食べ物を獲得する方法，つまり生業の中でも狩猟採集を多く描いている。狩猟採集の暮らしを端的に示しているものの一つが野鳥狩りである。「はじめに」と「あとがき」の表紙にあたる部分には鳥を焼いている夫婦が描かれているが，野鳥狩りの詳しい様子は「真ん中の日々」で生き生きと描かれている。野鳥狩りは夜の暗闇の中で行われる。高い木の上に登り，「巧みな鳴きまねでおびきよせ」，「来た鳥を手製の巨大な網ですばやくとらえる！」（真ん中4）。そして，「首をポキっと折って落とすと」，「下で待機してるモンが拾って，羽をむしる」。ナツにとってそこは「真暗闇」で，落ちてきた鳥をみつけることができない（真ん中5）。鳥を捕まえたら，すぐに調理に入る。野鳥を家に持って帰って熱湯をかけて羽をきれいにとる。「手も鳥も羽まみれでどこがきれいになったかワカラン‥‥！」といった「大変」な作業である。この時は42羽取れたが，それをすぐにゆでておく必要がある。そうした下処理のついでにゆでたてを，ナツとアセナティ母ちゃん，ウィリ父ちゃん，娘のフィメマの4人で「黙々と」食べる様子が描かれる。それは「さっきまで生きてた命のウマサに，うちふるえる瞬間」であるという（真ん中6）。

一方で，ツバルは一般的に狩猟採集ではなく，農耕と漁撈を中心とした生業を営んできたとされる。例えば，『文化人類学事典』には「フナフティ環礁以外の島々では貨幣経済が浸透しつつあるが，現在でもタロイモを中心とする農耕と漁撈という伝統的な自給経済が主流をなしている」（石森1994：108-109）とある。また，『オセアニアを知る事典』は，「人々の生活は半自給自足的であり，パンノキ，バナナ，タロイモなどの栽培，および漁労により食物を得る一方で，コプラ生産や出稼ぎにより現金を得ている」（山本1990：172l）とされる。ツバルを含むポリネシアで最も重要な農耕はココヤシとパンノキなどの果樹ではなく，タロイモなどの根茎類である（印東2002）。ツバルではタロイモのほかに，スワンプタロも栽培されるが，それは掘削田と呼ばれる地下水が染み出すほど下に掘り込んだ場所で育てられる。収穫後は株分けをし，定期的に施肥したり，雑草を除去したりしながら，人間が積極的に働きかける必要がある。

しかし，『南の島の異邦人』では，タロイモやスワンプタロが描かれることは少なく，ココヤシとパンノキなどの果樹が比較的多い。パンノキやココヤシは栽培されたものであるが，どちらも人間の世話をほとんど必要としない。ココナツに関しては男性たちが関わっている

描写が多く，若いココナツを取るため高い木に登る男性を「か‥かっこいい〜」とナツがうっとりする姿が描かれている（真ん中 12)。パンノキに関しては女性たちが関わっている描写が多く，「アセナティ母ちゃんはブレッドフルーツ（パンノキの実）で」，「いろんなウマいもんを作ってくれる」と説明されているほか，フィジー人教師のアンディのために持ってきたのもパンノキの実であり，ナツも熟れたパンノキの実を拾い，種を茹でて食べさせている。

農耕ではなく，狩猟採集としたのは，自然によって食べ物が与えられるという点を重視しているからだと思われる。農耕もまた自然の恵みを得ることには変わりはない。しかし，農耕には，自然を利用して作物を生産するといった側面が付随する。一方で，狩猟採集は自然からその恵みを分け与えられることである。『南の島の異邦人』では，自然であれ，人であれ，何かを与える存在として描こうとしているように思われる。与えることの対極にあるのが，自己の利益を追求する市場交換であり，先述した「親しくない人」はナツをまさにそのように誤解したのであろう。誤解された後に森に行ったのは，市場交換という世界に，他者と分かち合う世界を回復させるためなのかもしれない。その際に重要になってくるのは，自然によって惜しみなく与えられることである。自然によって与えられることで，与える存在としての自己を取り戻すのである。

7. おわりに

本論では，漫画『南の島の異邦人』を詳細に検討し，「どのように生きるのか」がどう描かれているのかを明らかにしてきた。

『南の島の異邦人』は，日本人の主人公が余所者として南の島を訪れるという基本的な構図を「冒険ダン吉」や『ラバウル戦記』と共有しており，その意味で日本の「南の島」漫画の系譜に位置付けられるだろう。ただし，描かれた時代背景が異なることもあり，主人公と現地の人々との関係はかなり異なったものになっている。「冒険ダン吉」の主人公は現地の人々を主従関係に組み込むのに対して，『ラバウル戦記』の主人公の水木は現地の人々とより対等な友情関係を形成しようとする。『南の島の異邦人』は『ラバウル戦記』に近いが，それとは異なり主人公のナツとアセナティ母ちゃんは家族的な関係の中にある。『ラバウル戦記』で水木はラバウルで暮らし，現地の文化を調査したかったとも記していたが，さまざまな事情からそれを実行に移すことはできなかった。『南の島の異邦人』のナツは水木が果たせなかったことを実現したといえる。

『南の島の異邦人』では，ナツとホームステイ先の家族を中心に島の暮らしが描かれており，まさにマリノフスキー（2010）のいう「実生活の不可量的部分」に漫画を通して接近するものである。これまでのホームステイを通して培ってきた家族としての関係性を生かしつ

つ，漫画という媒体によって広く一般に伝えるものになっている。

ナツは語学書を出版するほどツバル語が堪能であるが，興味深いことに『南の島の異邦人』では言葉を使ったコミュニケーションの限界が示されていた。ツバルの人々の間での会話では取り交わす言葉自体には何の意味がなかったり，あるツバルの人の言葉によってナツが傷ついたりする。しかし，『南の島の異邦人』全体を通して描かれるのは言葉の限界ではなくその先，つまり言葉では表せないコトバであったといえよう。思いやりや，妻の死を悼む心など，コトバは身体を通して描かれるほか，食べ物などを与えるという行為にも現れていた。ナツの到着は島の食べ物によって歓迎され，ツバル語を解さないフィジー人教師アンディにもパンノキの実と飛魚の干物が分けられる。そして，著者であり，主人公のナツはアセナティ母ちゃんなどから与えられることで，与える側に変わっていく。また，ツバルでは人間だけでなく，自然も与えてくれる存在として描かれている。自然とつながることでナツは与える存在として回復することが示される。

『南の島の異邦人』の最後，ナツが島を離れる場面の言葉は印象的である。

「狩猟採集の暮らしを，学ばせてもらう島―」
「でも，もっと大切なこと―」
「―を，たくさん，くれた島」
「―わたしの一番深いところから，ありがとう―」

狩猟採集という生業のあり方は自然とつながる重要なものであった。ただし，ナツは狩猟採集のやり方だけを学んだわけではなかった。そうではなく，「島」が「もっと大切なこと」を「たくさん，くれた」というのである。「もっと大切なこと」とは一体なんであったのだろうか。それは，島の自然と人々によって惜しみなく与えられること，そして，それによって自分が与える存在となることである。これがツバルの人々とともに見出した「どう生きるのか」という問いへのこたえではないだろうか。

謝辞

本研究は，2023 年度の東京経済大学個人研究助成費（研究番号 23-11）を受けた研究成果である。また，2023 年 12 月にナツさんとヒロさん（ナツさんと長年同居する恋人）が移り住んだ加計呂麻島を訪れ，ほんの少しだけホームステイさせてもらいながらお話を伺った。ここに記して感謝します。

注――――――――

1）なお，矢野は「日本外交における『南』に向かって出る論理を汲み上げ，理論化しそして正当化してみせる『発言』群」及び「南洋を日本の利益圏としてとらえ，南洋への進出を正当化する外交イデオロギー」を「南進論」と定義する（矢野 1979: 52）。

2）ヤマザキ（2023）は『ラバウル戦記』の「その三」を漫画家の絵，それ以外を画家の絵と指摘する。

3）NHK「100 分 de 水木しげる」『100 分 de 名著』2022 年 8 月 27 日放送におけるヤマザキマリの発言。筆者による文字起こしで漢字を当てはめた。

4）https://monden.daa.jp/profile.html

5）https://monden.daa.jp/index.html

6）https://monden.daa.jp/01tuvalu/2008nanumaga/05/0517.html

7）なお，ナツはサモアより前に滞在したソロモン諸島マライタ島の体験を「マンガ旅行記」を描こうとしていたが，子どもの世話に追われて「挫折」しているという。

8）https://note.com/mondennatu/

9）別の箇所でナツはそれを「人の世話をすると，自分のほうが，生きる力をもらうんです」と説明している（https://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/01fualia.html）

参 照 文 献

石牟礼道子・鶴見和子　2002 『言葉果つるところ』藤原書店。

石森秀三　1994 「エリス諸島民」『文化人類学事典』弘文堂。

岩本洋光　2002 「太平洋戦争における日本軍のラバウル占領統治――日本側の認識とその実態」『史苑』63（1）：6-41。

インゴルド，ティム　2020 『人類学とは何か』（奥野克巳・宮崎幸子訳）亜紀書房。

印東道子　2002 『オセアニア――暮らしの考古学』朝日新聞社。

奥野克巳　2020 「解説・マンガ人類学入門」奥野克巳・MOSA（編）『マンガ人類学講義――ボルネオの森の民には，なぜ感謝も反省も所有もないのか』日本実業出版社。

川村　湊　1994 『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房。

小林　誠　2019 「生活誌から生誌へ――ナツの暮らしたツバルと深いつながりの記」『コミュニケーション科学』49：111-135。

島田啓三　1967 『冒険ダン吉漫画全集』講談社。

竹内長武　n.d. 「冒険ダン吉（島田啓三著　大日本雄弁会講談社　1934）」http://www.iiclo.or.jp/100books/1868/htm/frame072.htm　2024 年 7 月 8 日閲覧。

ナツ もんでん奈津代　2008 『ツバル語会話入門』キョートット出版。

西野亮太　2019 「水木しげると『ラバウル戦記』――戦争の地獄と南洋の楽園の間で」『太平洋諸島の歴史を知るための 60 章』明石書店。

マリノフスキ，ブロニスワフ　2010 『西太平洋の遠洋航海者』（増田義郎訳）講談社学術文庫。

水木しげる　1997 『水木しげるのラバウル戦記』ちくま文庫。

――――　2002 『トペトロとの 50 年――ラバウル従軍後記』中公文庫。

もんでん奈津代　2010 『子連れ南の島暮らし――南太平洋のゆる～り子育て体験記』人文書院。

矢野　暢　2009 『「南進」の系譜――日本の南洋史観』千倉書房。
ヤマザキマリ　2023 「教訓を超えた人間の本質を描く――『ラバウル戦記』『総員玉砕せよ』」『別冊 NHK100 分 de 名著――「わが道」の達人　水木しげる』NHK 出版。
山本真鳥　1990 「ツバル［住民］」『オセアニアを知る事典』平凡社。
若松英輔　2021 『沈黙の力』亜紀書房。
鷲谷　花　1998 「コマの中の人間――1924～1951」『文学研究論集』15：109-128。
Besnier, Niko 2000 *Tuvaluan: A Polynesian Language of the Central Pacific*. Routledge.
Chambers, Keith, and Anne Chambers 2001 *Unity of heart: Culture and Change in a Polynesian Atoll Society*. Waveland Press.